



聖家族の祝日

2014年 2月



今日私たちは聖家族の主日をお祝いします。この日、親密さとやさしさが全体を満たし、典礼の中でもそれが表現されています。ナザレにいた慎み深い家族のやさしさと親密さを、私たちは感じ取り、自分のものとすることができます。マリアとヨセフはそこで生活し、イエスはお二人に従順で、次第にその普通の生活に関わっていかれることとなります。

今日の典礼では、この隠れた神の慎み深い生活における典型的なある側面が特に強調されています。それは従順です。

「キリストは神の子でありながら、従順を学ばれました。キリストはへりくだって、死に至るまで従順でした。」ベツレヘムからカルバリーまで、従順が友でした。そして福音書は、ナザレでのイエスのこの従順に重きを置いています。



今の時代、従順という言葉のもつ本当の意味が失われているようです。それは弱さの印となり、なんとなく自分の意志を持っていない人を表すようになりました。

「私が自分の父の家にいるのは当たり前だということを、知らなかったのですか。」慎み深く従順であったイエスは、母マリアに躊躇なくこう返答しました。これは福音書の中に見つけることのできる、イエスの最初の言葉です。この言葉を語ることで、イエスはご自分の使命を宣言され、神の権利がまず最初に来るものであることを確認されたのです。

しかし現実には、従順を正しく学ぶことはそうたやすいものではありません。最も初めの時から、アダムは神に従いませんでした。そしてアダムの子孫すべてがその反逆に巻き込まれることになりました。しかしアダムの反逆は、それとは対照的に、従順とは何なのか、また神が何を期待しておられるか、を示すことになるのです。

反逆の話はそれほど不思議なことでも、珍しいことでもありません。聖書には、神が反逆に対して素早く、厳格に裁かれる話が次から次へと出てきます。

モーゼに率いられてエジプトを出た神の民が約束の地に向かう出エジプトの話を詳しく見てみると、神は反逆を非常に重視されており、そのことから多くを学ぶことができます。なにより興味深いのは、ほかの罪に比べて神がどのように違った方法で反逆に対処されたかということです。砂漠でイスラエルの民、10回にわたりぶつぶつ文句を言って神を怒らせました。また民は5回神を疑いました。こういうことすべてが神を悲しませましたが、神はすぐに許されました。しかし反逆が起きると、神は素早く、力強く踏み込んで裁定を下されました。民数記の12章にミリアムとアロンが嫉妬のために反逆の言葉を口にする様子が描かれています。「彼らは言った。『主はモーゼを通してのみ語られるというのか。我々を通しても語られるのではないか。』」しかし嫉妬心と反乱の思いを心に抱いたのはミリアムだということを神はご存じでした。「主は直ちにモーゼとアロンとミリアムに言われた。『あなたたちは三人とも、臨在の幕屋の前に出よ。』主は雲の柱のうちにあって降り、幕屋の入り口に立ち、『アロン、ミリアム』と呼ばれた。二人が進み出ると、主はこう言われた。『聞け、わたしの言葉を。口から口へ、わたしはモーゼと語り合ふ。あらわに、謎によらずに。主の姿を彼は仰ぎ見る。あなたたちは何故、恐れもせず、わたしの僕モーゼを非難するのか。』主は彼らに対して憤り、去って行かれ、雲は幕屋を離れた。そのとき、見よ、ミリアムは重い皮膚病にかかり、雪のように白くなっていた。

アロンはミリアムの方に振り向いた。見よ、彼女は重い皮膚病にかかっていた。ミリアムは皮膚病を患い、他のイスラエルの民から7日間離れて過ごさなければなりませんでした。これはミリアムがその嫉妬心と影響力を持ちたいという野望によって、心の中に反逆の芽を育てさせたためでした。

もし神が私たちに服従を命令されるならば、それは私たちの人生に対して、神がある計画を遂行されるためです。そのために神は私たちの協力と信仰への忠実さを必要とされているのです。従順と信仰は、同じものではありません。しかしそのための秘密の鍵です。従順は信仰の印であり、信仰が結実した形です。アダムが従わなかったのは、それはアダムが神の言葉を忘れ、イブと誘惑する者の声に耳を傾けたからです。

私たちが生きていく中でイエスに従うということは、神により頼むという生き方を自発的に受け入れることにほかなりません。

イエスは言われました。「わたしの後に従いたい者は、自分を捨てなさい。」さて、人が何かを放棄するということの大きな意味は、神に従うことでその自由を犠牲にするということにあります。事実、人にとって自分の自由意思以上に大切なものではありません。この自由があるおかげで、人はいろいろな能力を使ったり、享受できたり、また思いのまま行動することができるようなのです。

人は、自分自身の自由意思を自由に捨てることで、自分自身を放棄することができると言えます。

このことから、従順な行いは人が神に捧げることでできる大きないけにえなのです。

従順な行いとは、見返りを求めることなく自由をいけにえとして捧げることでありと定義されてきました。それは無意味に無抵抗であることを意味するのではなく、神のご意志に自発的に身を捧げようとする真剣な行為であり、人としての正当な義務感から両親や上司、恩人らが発する命令に対する行為としても表現されているものです。それは機械的で物質的な物の考え方や、必要に迫られ強制された従順さからはほど遠いものです。従順は次の二つの要素がなければ完全ないけにえとはなり得ません。それは見返りを求めず自己を捨てること、見返りを求めず神のご意志に忠実であることです。この捧げものは、犠牲としての供え物よりずっと神の目には大切に好ましいものとなるでしょう。



物質的で強制された従順に満足するならば、私たちは自己を放棄するという内面的な行動を完成させることはないでしょう。なぜなら、外面的に命令を遂行させたとしても、内面に私たち自身の意志を保っているからです。そうであれば神のご意志と私たちの意志が一つになることはありません。

しかし見返りを求めないいけにえには、そのいけにえを差し出す側の無償で得た知識と認識が常に伴っています。私たちが私たちの自由を使うのは、完全な形で私たちが捧げることを毎日実践するときで、それはつまり、従順であろうとする度に、私たちの自由をいけにえとして捧げることを、常に新しい気持ちでやり直すことです。祝福された従順、それは主の祭壇上の私たちの捧げものを、意味のあるものとしてくれるのです。

律法を厳守するということは、神の言葉と契約に忠実なときにのみ成り立ちます。ですから十戒の一つ一つに従うということは奴隷のような恭順さをいうのではなく、それは愛のある態度なのです。 イエス・キリストの従順は私たちの救いです。そして私たちにもう一度神への従順に気づかせてくれます。キリストの生涯は、この世に来られたときから十字架で亡くなるまで、従順の一生でした。キリストはご両親と法的権力に対して、普通に義務を果たされることでその全生涯を過ごされました。受難の時は、従順をその限界まで追求され、非人間的で不当な力に抵抗することなくご自身を投げ出されました。

ご自身を完全に捧げられたことで、従順であることがその死を神への最も尊
いいけにえとすることができたのです。

イエスに従うことは十戒に従うことになります。旧約の律法は無効になった
のではなく、人はむしろ、ご自身で完全に体現され、その完全な意味を表さ
れ、永久に続くその価値を証明された聖なる方の中に、律法を見いだすよう
招かれているのです。

十字架の死によって、イエス・キリストはすべての生き物が従順であるため
の権利を得ておられます。キリストを通して、そしてキリストの福音と教会からの
出る言葉に従順であることで、人は信仰を持って神に近づくことができるの
です。キリストは神に仕えるのでなければ決して他には従われませんでした。
ですから私たちも必要であれば、不当な命令は拒絶することができますし、
人より神に従うことができます。

みなさん、自信を持ってイエスに従い続けましょう。そして、お互い慈悲と優
しさ、謙虚さと慎み深さ、そして忍耐を身にまとい、お互いを許し合ひましょう。
アーメン。

ラファエル植田勝行神父の米国での住所

St. Francis de Sales Oratory

2653 Ohio Avenue

Saint Louis, Missouri 63118

王たる宣教会のホームページ<<http://icrsp-jp.org>>

Email: sfds@institute-christ-king.org